

早稲田大学大学院日本語教育研究科

2010年9月

博士学位申請論文審査報告書

論文題目：韓国人日本語学習者の日本語リズム習得研究

申請者氏名：木下 直子

主査 戸田 貴子（大学院日本語教育研究科教授）

副査 吉岡 英幸（大学院日本語教育研究科教授）

副査 川口 義一（大学院日本語教育研究科教授）

本論文は、韓国人日本語学習者による日本語のリズムの習得過程を 3 年間にわたる縦断的調査によって明らかにし、その調査結果を踏まえたうえで、日本語音声教育におけるリズム指導の方法を検討したものである。

日本語学習者の日本語には母語からの転移が見られることが知られているが、韓国語と日本語には文法的に類似した点があることから、韓国人日本語学習者においては、文法上は習得が進むのが早い、発音については上級になっても母語の影響が強く残る学習者がいるという印象が持たれることがある。いわゆる「リズムの崩れた発音」は、このような日本語学習者の発音に慣れていない聞き手にとって聞きづらく内容が伝わらないことすらある。しかし、実際はリズムの崩れた発音とはどのようなものなのか、また、どのようにリズムの習得が進むのかということは明らかにされておらず、リズム教育の方法についても検討が遅れている。その理由として次の要因が挙げられる。

まず、第一に言語リズムの分析上の問題である。言語リズムには諸説あり、計測法自体が特定の言語リズムの単位に影響を受けるため、今までは日本語学習者の母語のリズムと日本語リズムの客観的な尺度による比較ができなかった。日本語リズムの分析は「拍（モーラ）」という音韻単位を用いて行われることが多いが、そもそも日本語学習者の母語には「拍（モーラ）」という概念が存在しないため、日本語音韻の枠にとらわれた議論しかできない。この問題点を解消するために、特定の言語のリズム単位に影響を受けない計測法の検討が求められていた。

第二に、音声習得研究においては、音声データ収集の難しさから横断調査が行われることが多く、縦断調査は少なかった。また、長期にわたる調査協力者の確保が困難であるため、縦断研究を行ったとしても音声データのサンプル数が限られており、実際の習得過程を観察することが困難であった。

第三に、日本語学習者による日本語リズムの習得の実態を解明するためには、生成と知覚の両側面から調査を行う必要があるが、先行研究では生成もしくは知覚のどちらかが取り上げられているものが多く、生成と知覚の関係について言及できるものが少なかった。

第四に、音声習得研究においては、日本語学習者の音声における音響特性等の物理的特徴を中心とした分析が行われることが多く、学習の主体である学習者の個人要因が考慮された先行研究は少なかった。近年、日本語学習者の習得に関わる学習者要因に関する調査の必要性が指摘されている。

本論文は、以上の点を踏まえたうえで、よりよい日本語リズム教育への検討に向けて、これらの問題に挑んだものである。以下に、各章ごとの内容を概略する。

第1章では、言語リズムの分析上の問題点を指摘し、日本語のリズム教育の問題との関連性について述べることにより、本論文の問題意識と研究目的を明らかにしている。

第2章では、先行研究を読破し咀嚼したうえで、これまでの研究における日本語リズムの扱いについて整理している。また、日本語学習者による日本語リズムの習得に関する先行研究を生成、知覚、生成と知覚の関係別に分類し、結果をまとめている。

第3章では、リズムの計測法について検討を行っている。これまで日本語教育において用いられてきた「モーラ」に基づいた従来の計測法 (Ratio Measures: RM) の問題点を指摘し、Interval Measures (IM) および Pairwise Variability Indices (PVI) という新たな2種類の計測法を加えた3種類の計測法から、リズム習得研究に適した計測法を検討している。

第4章では、本研究の調査対象となる韓国人日本語学習者の母語のリズムの検討に入る。先行研究における韓国語のリズムには諸説あり、強勢拍リズムであるとする説 (李 1982、1993)、音節拍リズムであるとする説 (Zhi et.al 1990)、モーラ拍リズムであるとする説 (Cho 2004) があり一致していなかった。本研究では、第3章で行ったリズム計測法の検討を踏まえたうえで、韓国語 (ソウルおよび釜山方言) のリズムが調査対象とした日本語や英語のリズムと比較してどのような特徴があるのかを明らかにし、中国語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、タイ語など、18言語のリズムの中での位置付けを行っている。

第5章および第6章では、韓国人日本語学習者によるリズムの生成と知覚の習得過程を3年にわたる縦断調査の結果から明らかにしている。生成調査は キャリアセンテンスに入れた単語読み上げ、 イソップ物語「北風と太陽」の文章読み上げによるものである。一方、知覚調査は キャリアセンテンスに入れた単語の知覚範疇化、3音節語の聞き取りによるものである。

第7章では、第5章および第6章で得た韓国人日本語学習者の生成と知覚の習得結果と学習者要因に関する調査を行っている。本章では、学習動機、学習ストラテジー、知覚学習スタイル、作動記憶容量、ピリフなどを取り上げ、多角的な視点から韓国人日本語学習者の生成と知覚の習得と相関関係のある学習者要因を特定し、リズム習得に及ぼす影響を考察している。

最終章の第8章では、本研究で行った調査の結果を総合的に考察し、従来のリズム教育方法および教材を分析したうえで、新しいリズム教育の考え方を提案している。具体的には、研究成果を踏まえた独自のリズム教育用教材を作成し、教室活動をデザインしている。

本研究の成果として、次のことが挙げられる。

1) リズムの計測法を比較検討し、客観的な尺度でリズムを分析できる計測法を見出したこと

従来の日本語教育で用いられてきた計測法の問題点を指摘したうえで、言語類型論において未分類の言語リズムを分類する目的で使用されている計測法である Interval Measures (IM) と Pairwise Variability Indices (PVI) に着目し、これらの妥当性を検証するために調査を行った。調査協力者は日本語母語話者5名、韓国人上級学習者5名、初級学習者5名である。録音データの音声波形とスペクトログラムから子音区間長 (consonantal interval) 母音区間長 (vocalic interval) 母音間区間長 (intervocalic interval) 全体長を計測し、統計分析を行った。

その結果、日本語学習者のリズム習得の特徴とレベルの差が把握できる計測法が、PVI であることが判明した。本研究で取り上げた新たな計測法は、近年、言語リズム類型や乳幼児の言語獲得・言語弁別能力の研究のために使用されているが、日本語教

育的観点から比較検証されたことはなく、極めて独創性のある視点から検討が行われており、高く評価できる。特定の言語のリズム単位に影響を受けない計測法を見出したことで、今までの問題点が解消し、学習者の母語のリズムと日本語リズムの客観的な尺度による比較ができるようになったことに大きな意義があると言える。

本研究の成果から、韓国語母語話者が日本語習得過程においてリズムを獲得していく様子が客観的に測定できる道が開かれた。この点は、本研究の非常にオリジナリティーの高い部分であり、関連の諸分野に与える影響の大きさを予感させる。

2) 3年間にわたる日本語リズムの縦断調査を行い、リズムの習得過程を明らかにしたこと

本研究では、調査開始時に合計 34 名の韓国人日本語学習者を対象に調査を行い、そのうち 17 名による日本語リズムの習得過程を 3 年間にわたって追いつけた。音声習得研究においては、音声データ収集のために録音機材や雑音のない静かな環境が必要であることから、このように多くの調査協力者から長期間にわたり行われた縦断調査は過去に類を見ない。この点は本研究の優れた点であると高く評価できよう。

上記(1)で妥当性を確認した計測法 PVI を用いて日本語母語話者および韓国人日本語学習者のリズムを分析し、特殊拍(促音、長音、撥音)の種類およびリズム型によって習得度が異なるかどうかを明らかにした。その結果、特殊拍の種類の違いによって同じように習得が進むわけではなく、長音が最も習得が困難であることが示された。また、リズム型別に観察を続けていくことにより、重音節と軽音節の組み合わせから成る複雑なリズムの習得が困難であることが確認され、母語におけるリズム獲得との共通性も示唆されている。

3) 文章を使った日本語リズム生成調査から、韓国人日本語学習者の日本語リズムの特徴を明らかにしたこと

先行研究では、リズム習得に関する調査は単語・文を中心に行われており、単語・文と比較して、計測が極めて困難である文章のリズムを分析した調査は管見の及ぶ限り見当たらない。日本語においては「おばさん」「おばあさん」のように単語レベルにおける拍数の違いにより、リズムの違いが説明できるため、単語・文を対象とした調

査によって日本語学習者のリズム習得が語られることが多かった。これまでリズムを物理的に計測する方法の多くは音声分析ソフトで母音や子音を計測し、単語内に占める母音や子音の割合を求めてきた。しかし、日本語の特殊拍や無声化した音声は持続時間が短くなる傾向があり、すべてのモーラが等時的であるとは言えないため、この方法には問題があった。また、発音に対する注目度が高い単語・文の読み上げによる調査だけではなく、発音に対する注目度がより分散される文章を対象とした調査が望まれていた。

本研究では、上記（１）で妥当性が確認された PVI を用いることにより、文章のリズムに関する調査が可能になった。そこで、韓国人日本語学習者 16 名を対象に、イソップ物語「北風と太陽」の文章読み上げによる調査を行った。NS および英語母語話者によるリズムとの比較対照のため、筑波大学の「多言語音声コーパス」の NS10 名、英語母語話者 6 名のデータも用いた。また、リズム習得における方言の影響を解明するために、ソウル方言話者 10 名、釜山方言話者 10 名を対象に調査を行った。

その結果、先行研究で明らかになっていなかった韓国語のリズムについて、それが英語とも日本語とも異なるものであること、およびソウル方言と釜山方言の間にはリズムの類型に違いがないことが判明した。また、韓国語を母語とする日本語学習者の文章に見られる日本語リズムには、韓国語のリズムが転移しており、日本語を話しているときにもリズムの使い分けはなされていないことが明らかになった。

4) 日本語学習者による日本語リズムの生成と知覚の関係性について言及したこと

本研究では、日本語学習者による知覚判断基準の変化を明らかにするために、NS16 名の知覚調査との比較検証が行われている。特殊拍別に分析を行ったところ、特殊拍の種類の違いによって習得の度合いが異なり、長音の知覚が最も困難であることが分かった。この結果は、上記の生成調査の結果と一致しており、本研究は、1960 年代以降に生まれた世代の韓国人日本語学習者の母語において長短の弁別が消失してしまったことをその理由として指摘している。

しかしながら、全体としては国内外ともに韓国人日本語学習者による日本語リズムの生成と知覚の習得には相関関係が見られないことが明らかになっている。知覚と生

成の両側面から調査を行ったことにより、日本語リズムの生成と知覚の関係性について言及できたことが、本研究の成果のひとつであると言える。

5) 日本語学習者のリズム習得に関わる学習者要因を明らかにしたこと

学習の主体である学習者の個人要因を視野に入れた音声習得研究が少ない中、本研究では、日本語特殊拍のリズムにおける知覚と生成習得の結果を用いて、知覚と生成の結果と相関の高い学習者要因を特定し、習得が進んだ上位学習者と習得が進まなかった下位学習者のグループにそれぞれ共通した学習者要因を検討した。その結果、日本語学習者のリズム習得には、ヒリーフ、ストラテジー、学習スタイル（聴覚型）、学習動機、作動記憶容量等が関与していることが明らかになった。本研究により蓄積された豊富なデータは、今後の音声習得研究にも貢献する情報を提供できるものである。

6) 独自のリズム教育用教材を作成し、新しいリズム教育の考え方を提案したこと

本研究の結果をもとに、リズム教育において考慮すべき点を明示し、まず既存の指導法や教材分析を行った点が評価できる。そのうえで、実際の教室活動を想定し、独自のリズム教育用教材を作成し、リズム教育の導入、練習、応用練習と段階を分けて具体的な指導案を提示している。応用練習では、意味交渉を優先させつつ、リズムを調整していくことが提案されている。

実際の教室指導においては、明示的フィードバックまたは暗示的フィードバックのどちらをどのタイミングで使用するか、作成したリズム教育用教材の語彙の難易度と学習者の日本語レベルなど、今後検討すべき点もあるが、これらの点を考慮したうえで、学習者に適したリズムの教材化を進めていくなど、さらなる発展が期待できる。なお、本研究は平成 19-20 年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2) 課題番号 19520463（研究代表者：木下直子）の助成を受けて行われた研究の一部を含んでおり、その成果を国内外に発信していくものである。

以上のことから、本論文は日本語教育、特に音声教育の領域に大きく貢献する論文であり、日本語教育学博士学位を授与するに値するものであると評価する。